

学術情報リテラシー教育入門



文脈としての情報リテラシー教育を考える

大阪大学附属図書館
総合図書館 利用支援課
上 原 恵 美

平成21年度大学図書館職員短期研修
京都大学: 9月30日(水)
東京大学: 10月28日(水)

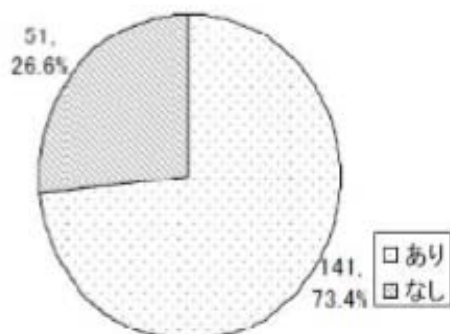
本日の内容

- はじめに 現在の大学における情報リテラシー教育
- ある大学の事例
 - ✓実施
 - ✓疑問
 - ✓改善に向けて
- 「文脈としての」情報リテラシー教育とは
- 教員と図書館員
- 学習支援の仕掛け
- 次のステージは「評価」？
- おわりに 倦まず弛まず、諦めず



1 はじめに

■ 現在の大学における情報リテラシー教育：実施の有無



情報リテラシー教育の有無

「大学図書館の経営に関する調査」平成18年11-12月実施

大学図書館に対する調査（調査対象は262館）では、7割以上の大学で「情報リテラシー教育」に関する授業が行われている。

『今後の「大学像」の在り方に関する調査研究（図書館）報告書』平成19年度3月筑波大学 p.113

「学術情報基盤実態調査：コンピュータ及びネットワーク編」平成19年度



大学図書館に特定しない調査（大学長宛に送付、調査対象は747大学）では、平成18年度現在で9割以上の大学で「情報リテラシー教育」に関する授業が行われている。

文科省「平成19年度学術情報基盤実態調査」平成21年3月

1 はじめに

■ 現在の大学における情報リテラシー：実施内容

「大学図書館の経営に関する調査」平成18年11-12月実施

情報リテラシー教育の受講割合の分布

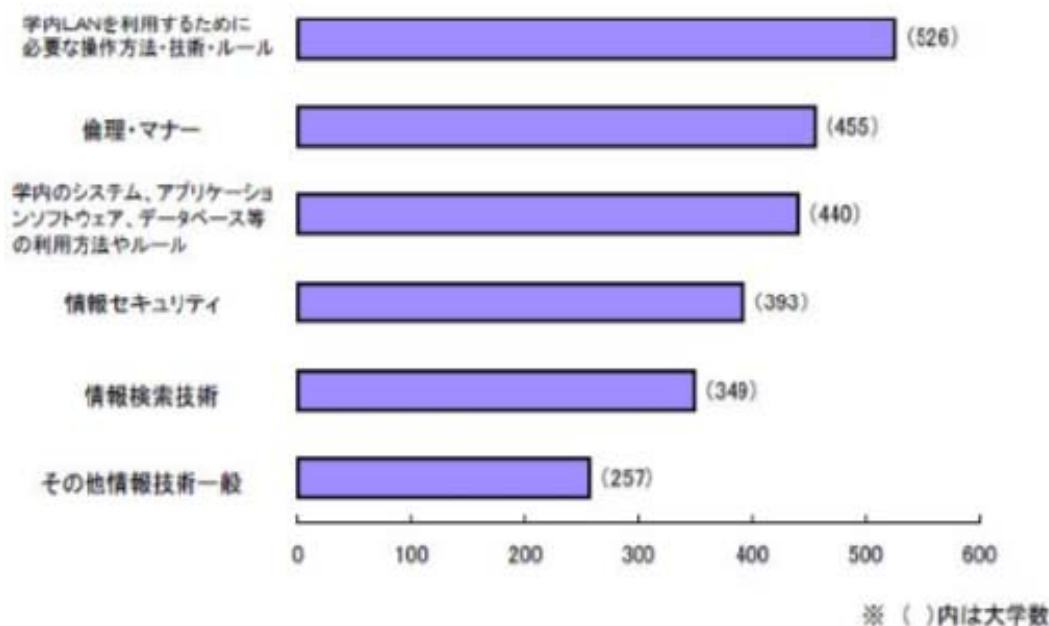
割合	図書館オリエンテーション		データベース等の利用教育		教育支援・レポート作成支援	
0%～	28	16.8%	82	65.1%	48	54.5%
5%～	21	12.6%	24	19.0%	16	18.2%
10%～	20	12.0%	6	4.8%	12	13.6%
15%～	28	16.8%	5	4.0%	6	6.8%
20%～	35	21.0%	6	4.8%	1	1.1%
25%～	13	7.8%	1	0.8%	2	2.3%
30%～	9	5.4%	0	0.0%	1	1.1%
35%～	3	1.8%	2	1.6%	2	2.3%
40%～	3	1.8%	0	0.0%	0	0.0%
45%～	1	0.6%	0	0.0%	0	0.0%
50%～	6	3.6%	0	0.0%	0	0.0%

参加のべ人数と奉仕対象学生数をもとに計算した結果
図書館オリエンテーションの浸透度は比較的高い（20%～25%未満）が、データベース等の利用教育（0%～5%未満）やレポート作成支援（0%～5%未満）は低い。

1 はじめに

■ 現在の大学における情報リテラシー：実施内容

「学術情報基盤実態調査：コンピュータ及びネットワーク編」平成19年度

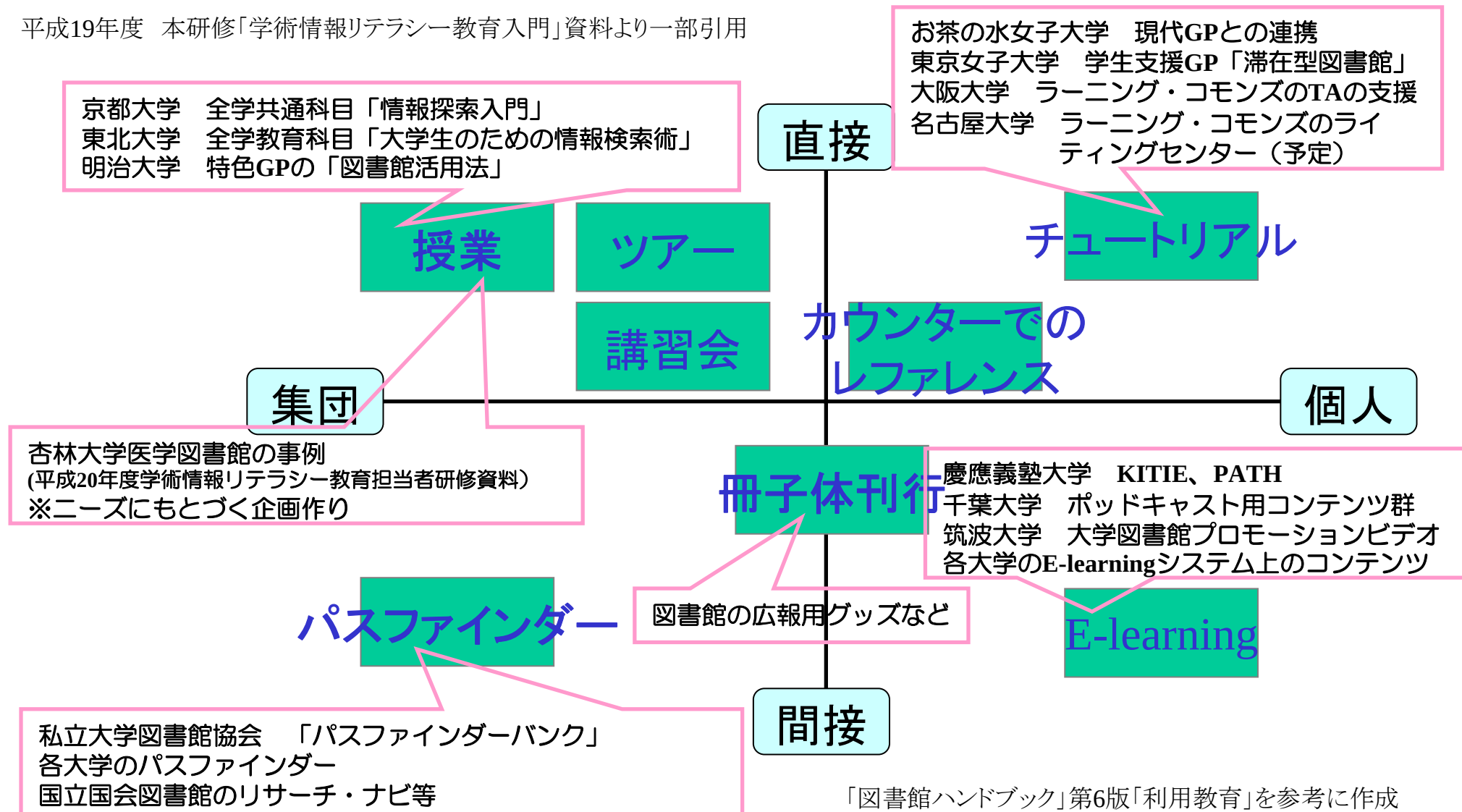


コンピュータリテラシーの視点による調査項目設定と思われる。図書館が得意としており、よく実施している「情報検索技術」については、思ったほど実施されていないという結果？このトピックは、情報リテラシー教育で取り上げる必要性が低下していると考えられている？

1 はじめに

■ 現在の大学における情報リテラシー：代表的な実践例

平成19年度 本研修「学術情報リテラシー教育入門」資料より一部引用



「図書館ハンドブック」第6版「利用教育」を参考に作成

2 ある大学を例に

■ 図書館独自の講習会実施

- 新入生対象の図書館オリエンテーションや各データベース毎の使い方など。
→データベースや電子ジャーナル等の費用対効果の維持・上昇を図る企画でもある。

■ 授業との連携

- 平成11年度後期以降、共通教育科目「情報科学演習」（年間約40クラス）の1/15回を図書館員が担当する。
- 平成12年度以降、法文学部経済学専攻（夜間主含め6クラス）の基礎演習IまたはIIにおいて2～4コマを図書館員が担当する。
- 教員からの要請によるオーダーメイドの講習会、出前講習会の実施。
→意識が高い教員のため、毎年要請される率が高い。
- 受講生のほとんどが1年生のため、文献入手法の初歩程度までを講義する。

2 ある大学を例に

■ 授業の工夫(その1): 授業の支援として

- ・ 教員との事前相談を行い、実施内容にシラバスの内容を反映させる。

教員と協働した事例

「政策情報基礎演習」 法文学部総合社会システム学科政治学専攻 1年生必修授業(56人)

- ・ 面談とメールによる打ち合わせ
- ・ 教員は米国流の**大学初年時教育の”writing”**の授業をイメージしていた
- ・ 「図書館ツアー」ではツアーと図書館職員による講義、課題実習を組み合わせで3コマ実施。
- ・ 多人数なのでグループ分けをして、PC実習室、ツアー、閲覧室での課題実習を教員、TA、図書館職員が同時進行した。
- ・ 「図書館ツアー」の3コマ以降の授業中でも、実習時間は適宜、教室と図書館の行き来を教員が指示していたらしい

2 ある大学を例に

[スケジュール]

日にち	内容
4月15日	(1) イントロダクション：大学で学ぶスキル
4月22日	(2) 図書館ツアー[1]：調べる[1]図書館の本
4月29日	休日
5月6日	休日
5月13日	(3) 図書館ツアー[2]：調べる[2]図書館の論文
5月20日	(4) 図書館ツアー[3]：調べる[3]図書館の情報検索
5月27日	(5) 情報を整理する
6月3日	(6) 読む
6月10日	(7) まとめる
6月17日	(8) 批評する
6月24日	(9) レジュメをきる
7月1日	(10) プレゼンテーション[1]
7月8日	(11) プレゼンテーション[2]
7月15日	(12) ライティング[1]
7月22日	(13) ライティング[2]
7月29日	(14) ライティング[3]
8月5日	(15) ライティング[4]

課題がはっきりしている
学生のモチベーションが高い授業



図書館側も対応しやすい

図書館職員担当部分では、下記の課題のため
OPACの読み方(書誌情報の読み方)、引用文献
の意味と意義の解説、学術雑誌のブラウジ
ングの意義とブラウジングの方法、機関リポジトリ
と本学の研究者総覧の紹介、レファレンス資料
(冊子やWebの辞事典・人名辞典など)の使い方
について資料を用意した。

[課題 2] 政治学・国際関係論に関して、あなたが学びたい内容を含んだ研究図書を1冊、論文を1本、入手しなさい。その上で、①入手した文献の書誌情報、②概要、③その文献を元にして、さらにどのような文献を入手すると、知識を深めることが出来ると判るか、以上をまとめてレポートする。

[課題 3] 政治・国際関係論専攻の教員のうち、ひとりを選び、その教員が執筆した著書ないし論文を入手しなさい。その上で、今度は逆にその著書・論文を検索するとしたら、どのような検索語が必要だろうか。想定されるキーワードを10個挙げなさい。

2 ある大学を例に

- 授業の工夫(その2):「考える講義」を目指して
 - 教員との打ち合わせが十分に取れない科目
 - 学生により、事前の知識や技能の格差が大きい科目

学生のモチベーションが低くなりがち



図書館側は対応しにくい

2 ある大学を例に

■ 授業の工夫(その2):「考える講義」を目指して

対応しにくいなりに・・・

考えさせる「つぼ」を模索

「情報科学演習」 全学共通教育科目 年間約40クラス

- ・ 出版年により配架場所が違う→OPAC検索結果を出版年順に並べ換え→検索結果の**出版年の項目を読み取れる**ようにする
- ・ ある著者の著作一覧を表示させて、どのような分野を専門とする人物かを**推察させ、文章化**させる
- ・ WebcatPlusの連想検索でキーワードを拾う→自分で思いつかなかったものをメモさせる→論文検索でも同じキーワードで検索させる→同じテーマで複数の情報源を検索させ、それぞれの**情報の特性に気づかせる**きっかけを作る
- ・ 課題の詳細な条件は、プリントに記入せず口頭で追加する→講師に集中させ**メモを取らせる**

3 ある大学を例に: でも何かが違う..

■今後の課題

- 図書館側でのリテラシー教育内容の体系化と「見える化」
- 授業との連携の実質化

具体的な状況：図書館のがんばりは認知されているが・・・

- 図書館の授業をどう取り入れたらよいか、**教員側も戸惑っている**
 - 同じ学生が別の授業でも図書館員の同じ内容の授業を受講している。
 - 大学のカリキュラム体系の混乱に、図書館の情報リテラシー教育が巻き込まれているのではないか。
- 授業の1コマにもかかわらず、全体における図書館担当部分の**位置づけが不明確**
 - 授業の全体像や目標が不明確なまま図書館員が授業を実施している。
→教員、図書館員双方の責任
 - 教員と図書館員との間で、議論を重ねていく必要があるのではないか。

図書館からよい提案をするためにも、「教育」を知らなくては・・・

4 ある大学を例に：状況を変えたい

■「教育」の文脈に参加するために

- 体系化と「見える化」のためにガイドブックを作成する
 - 教員と図書館員で、初年次や共通教育で使えるガイドブックを作成する。
 - e-learningのコンテンツを作り、それを授業に取り入れてもらう。
- リンクリゾルバを導入して知った「ナビゲーション」の効用
 - 定型的な調査スキルは、「ナビゲート」することにより利用者に考え方のプロセスを意識化してもらえる可能性があるのではないか。
 - 断片的に存在する情報や情報源を、「見える形」で「意味あるもの」として繋げていく「ナビゲーション」の手法を、情報リテラシー教育でも取り入れられないか。

 「教育」あるいは「学び」の文脈で
図書館の情報リテラシー教育を見える化する？

5 「文脈としての」情報リテラシー教育

■ 問いかけとして...

- データベースなど図書館資料の利用法、操作法を教授することが情報リテラシー教育か？

→ No.

- なぜ図書館では図書館資料の利用法等を教授するのか？

→ 以前は、学習（学術）情報は図書館に偏在（「**かたよって**」存在）していた。

→ しかし、今や図書館以外にも遍在（「**あまねく**」存在）し、しかもその数や種類、形態が多種・多彩。図書館以外にも専門の情報機関が存在し、一般にも認識されるようになった。

 図書館の外（具体的には「教育」や「学び」）を知り、それらの文脈のなかで自らを位置づける必要はないか！

5 「文脈としての」情報リテラシー教育

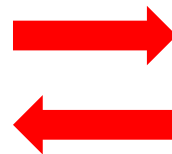
■「教育学」をかじってみる

- 「情報リテラシー」と「オープン教育」の類似性

情報リテラシー

- 自主的に情報選択
- 情報を探索・整理
- 探索術を習得
- 発見型の学習
- 多様な情報資源
- 多様な学習環境

類似



オープン教育

- 主体的学習
- 学び方の学習
- 思考力を発達
- 課題学習
- 多様な教材
- 多様な教室・家具

「オープン教育」について：『新教育学大事典』第1巻 第一法規出版 1990 p.266-268

5 「文脈としての」情報リテラシー教育

■「教育学」をかじってみる

- 「TeachingからLearningへ」

→以前のリテラシーは「読み書き、そろばん」

→脱工業化社会においては「批判的思考、説得的な表現、問題解決力」

今後着目すべきことは

✓利用者を中心に据えた調査

✓とりわけ、学生の学習がどのように行われるかの把握

「学習すること」について知ることなしには、「図書館を利用した学習」の効果を測定するという、**図書館評価**には対処できないだろう

5 「文脈としての」情報リテラシー教育

- **学習理論**を通して「リテラシー」を考える

伝統的パラダイム Teaching	構成主義的パラダイム Learning
記憶すること	理解すること
思い出す	発見する
すべてに適応する一つ	あつらえ;オプションに富む
望ましくないものを取り除く才能	育成し、探し当てる才能
繰り返し	乗換えと構成
事実の取得	事実+概念枠組み
個別の事実	体系だった概念的スキーム
伝達	構成
教員＝主人で指揮者	教員＝専門家でメンター
固定した役割	可動的役割
固定した教室	可動、変更可能な教室
唯一の場所	多数(様)の場所やスペースタイプ
累積的な評価	累積的かつ発達的な評価

5 「文脈としての」情報リテラシー教育

■図書館が情報リテラシー教育にかかわる論点

- 大学全体で展開する情報リテラシー教育のなかで、次のことが問われる
 - いかなる部分を担うのか
 - いかなる部分を担うべきなのか
 - いかなる部分を担うことができるのか

野末俊比古.「情報リテラシー教育と大学図書館:「利用教育」から「指導サービス」へ」『図書館雑誌』2008, 102(11) p762-765

■そもそも学習支援は難しい・・・

- 「教育」あるいは「学習」は、主体性の問題がある
- 主体的に行動できるような状態になっているか
- 指導しうるレディネスが学生に確保できているのか

永田治樹.「講演 インフォメーション・コモンズ ラーニング・コモンズ」『ラーニング・コモンズ:学びの場の新しいカタチ』(大図研シリーズ No.25)2009.1, p1-18

6 教員と図書館員

■教員の役割の変化

- 「教育」から「学習」へパラダイムシフト
- 教員の役割は、知識教授者からメンターへ
- 課題設定でさえ、学習者の発見にまかせる

■図書館員はどうか 新しい名称の図書館員の出現

- リエゾン・ライブラリアン liaison librarian
→学部学科との仲介・連携をミッションとする
- ブレンディッド・ライブラリアン blended librarian
→カリキュラムデザイン、インストラクション技術についての知識や技能を持つ

❖ **危機感**: 教育の文脈の中に統合されなければ
図書館は大学の中でマージナル（周辺）な存在になるのではないか

❖ **レファレンスサービスの重要度増**: サービスの見直しと意識改革を伴う

文脈としての情報リテラシー教育：

7 学習支援の仕掛け

■「文脈」と考えるからこそ「ラーニング・コモンズ」

- 従来のリテラシー教育が苦手だったこと

- 受講者のモチベーションの喚起

- 受講者は知識を現実の課題（レポート作成等）で活かせていない

- ラーニング・コモンズでの情報リテラシー教育

- ラーニング・コモンズは「学習」にフォーカスしたコンセプト

- 「学習」を促進する仕掛けの一つとして実施されるリテラシー教育

- リテラシー教育をより実践的に展開できる

■大学の学習支援の協働の場 ラーニング・コモンズ

- ➡大学のミッションに対する貢献度を高めるチャンス

- ➡他部局と共同で各種GPなどで資金獲得し、ラーニング・コモンズ開設を目指す図書館あり

7 学習支援の仕掛け

■教育GP採択の例：湘北短期大学（平成20年度採択）

文部科学省

質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)

神奈川県内の短期大学で唯一、湘北短期大学が選定されました！！

《取組名称》

図書館を実践の場とする学科横断PBL教育

*DITO(Do IT Ourselves) ～複数学科学生と教員の共同演習による実践的PBL教育モデルの確立～

9月30日、文部科学省から発表されました「平成20年度 質学教育推進プログラム(教育GP)」事業におきまして、湘北短初年度選定の栄に浴しました。本取組は、情報系の学科を持つ短期大学としての特色を活かし、これまでの*PBL(Project-Based Learning)を活かした*ICT教育の実践の上に、図書館を“ラーモンズ”として活用するという、新しい発想に基づいた教育プログラムです。

図書館から ラーニングコモンズへ

ラーニングコモンズとは、学生の自主的な問題解決による学習活動全般を支援する公共の場という意味。本学図書館は、ラーニングコモンズを目指し、2009年3月に各学科の学生がグループ作業ができるオープンスペースが整備されます。

「PBL」に注目！

Project-Based Learningという教育手法の場として図書館を活用する

教員

図書館員

本取組のイメージ

優れたICT技術者の育成

コミュニケーション
能力の育成

企画構成力／
ICT 活用能力の育成



④ 学科横断PBLのメリット

- 異文化を持った学生との交流
- 制作とユーザ側の双方の理解
- 異なる学科の教員同士の協同

教員

ディート DITO演習の詳細

※DITO・・・Do IT Ourselves(自分たちでつくり上げよう)の略

情報×三行

文脈としての情報リテラシー教育：

7 学習支援の仕掛け

■大阪大学のラーニング・コモンズ(2009年6月開設)



← 試験前には大盛況、入館者数も増えた



特に利用法を指導したわけではな →
いが、ディスカッションは当然の
ごとく行われている

文脈としての情報リテラシー教育：

7 学習支援の仕掛け

■大阪大学のラーニング・コモンズ(2009年6月開設)



← TAが参考調査担当の図書館員と同じカウンターにいる
文学研究科 2 人、理学研究科 1 人、経済学研究科 1 人

担当時間表が掲示されている。TAの →
活用について、**図書館側が模索中**

TA(ティーチング・アシスタント)担当表

7月 ~

		12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00
祝日	月	文	文	文	文	文				
21	火	文	文			理	理	理		
22	水	文	文				文	文	文	
23	木		文	文	文		理	理		
24	金	経	経	経	経	経				

◎土・日・祝及び授業休業期間は不在です。

8 次は評価？

■情報リテラシー教育の評価は可能か

- 米国の例では、評価の焦点は実施手法の開発からアウトカム(outcome)へシフトしている
 - 評価の目的は、図書館側の「プログラム開発に活かす」ことから、「学習効果の向上を図る」ことにシフトしている。
 - 大学の質保証のための認証評価基準で、大学図書館の教育支援、とりわけ情報リテラシー教育が重要な基準になっている影響か。
 - Educational Testing Services(ETS)のiSkillsなど、教育学的メソッドを使った評価事例がある、らしい。
- 図書館側の自己満足に終わらないためにも、アウトカムに着目した評価は望ましいのではないか。

9 おわりに

■「断片」から「文脈」へ

- これまで、主に図書館内部の事情による情報リテラシー教育を実施してきた
 - データベース等の高価な学習資源の費用対効果の向上を目指して、また図書館の存在感を示すために。
- 今後は、大学全体の「教育」の文脈の中で図書館の情報リテラシー教育を考えてみる必要がある

■それぞれの「文脈」のもとに

- 各大学の教育の文脈を考えるなら、その大学に相応しい情報リテラシー教育のありかたがあるはず
 - 教育資源、協働できる人材、組織は大学によって異なる
 - 各大学の目標が異なる
- 試行錯誤しながら、たゆまない図書館サービスの開発を！

ご清聴ありがとうございました

参考文献 先に挙がっていない文献のみ

「5分でわかる学習理論講座」第5回：実践を通じた学習のなかで知識を獲得する「認知的徒弟制」 東京大学大学院 情報学環 ベネッセ先端教育技術学講座「BEAT」メールマガジン「Beating」第16号 2005. 9. 22
<http://www.beatiii.jp/beating/016.html>

D Beagle ; 三根慎二訳. 「ラーニング・コモンズの歴史的文脈」『名古屋大学附属図書館研究年報』2008, 第7号 p25-34

上田直人、長谷川豊祐. 「わが国の大学図書館におけるラーニング・コモンズの事例研究」『名古屋大学附属図書館研究年報』2008, 第7号 p47-62

竹内比呂也. 「総論：デジタルコンテンツの彼方に図書館の姿を求めて」『情報の科学と技術』2007, 57(9) p418-422

大阪大学. 「クローズアップ ラーニング・コモンズ：TeachingからLearningへ ReadingからLearningへ」『阪大Now』2009, No. 112 p4-7